中高生とともに差別と闘う

『肚があるのか、ないのか』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

肚があるのか、ないのか

昨年暮れ、大好きだった活動家Hさんの訃報が飛び込んできました。六十九歳。それなりとみればいいのか、早いとみればいいのか…。歯に衣着せない発言の中に真理が垣間見え、本当に学ぶことの多い方でした。

あるとき、私が足尾銅山鉱毒事件の田中正造を扱った演劇を見たときのこと。田中正造の生き様に感銘し、「子どもたちにも見せたい！」と思った私は、Hさんを含めた数人の保護者に相談をかけたことがありました。すると、

「田中正造はいい！」

と、ノリノリで大賛成してくれました。ところが、

「しかし、とにかくお金がかかる。中学生に見せるだけでは支払いができない。二部公演にして、昼は中学生の部、夜は一般の部としてチケット販売すれば可能かもしれない。チケット販売に協力してもらえないだろうか」

とお願いしたところ、せっかく上がっていたトーンがスーッと落ちてしまいました。すると、Hさん。

「先生、もしチケットが売れずに赤字になったらどうする？」

「あー、いやそのときは…」

私が口を濁していると、

「先生、私は先生の肚を知りたいんだ。先生が、もし赤字が出たら自分の給料で払うと言うくらいの肚があるのなら、私らも協力する。けど、その覚悟がないなら協力はできない。その肚があるかどうかを訊いているんだ」

一刀両断にされたものの、「確かに！」と活眼を開かされた思いでした。

「わかりました。私が責任持ちます」

言ってしまいました。（笑）

「支払い」の顛末

ですが、そのあとの保護者会の動きが本当に凄かったのです。実行委員会を立ち上げ、チケットが確実に捌けるところを探し出し、後援を取りつける。元JA会長、元総理大臣秘書などに私をあいさつに連れて行く。そして最終的にはチケットは完売。当日の受付、駐車場整理、会場案内などの手配もすべて取り仕切ってくれたのです。

一般の部、実際はどれくらい席が埋まるのか――。不安でした。が、夜が迫るにつれ次から次に押しよせる車、車、車。結局会場は、立ち見が出るほどの盛況となりました。

思い出してください。現実的に気になっていたのは、「支払い」です。どうなったのか。実は予想を大きく上回る「黒字」となり、それを元手に、そのときの実行委員会メンバーが中心となって、芸術文化振興のための民間主導の「友の会」が結成されることになりました。やってみないと分からないものです。

私のこのときの学びは本当に大きかったように思います。受験勉強として「足尾銅山鉱毒事件　田中正造」としか覚えてこなかった自分に情けなさを感じたこともそうですが、自分のやりたいことがあるとき、そこに自分の肚があるのかどうか――。自分がどう生きたいのかを、Hさんに問われた瞬間の学びは、今でも忘れることができません。

やると決めた以上は責任を持つ。覚悟を持つ。こう聞けば孤独であるかのようですが、同じ思いを持つ仲間は必ずいて、絶対「ひとり」にはしない。知恵を合わせて共に困難を乗り越えた仲間とは、格別な絆が生まれていく。そのことを実感させてもらった体験でした。

Hさんとの出会い

そんなHさんとの最初の出会いは、赴任したすぐの四月。家庭訪問でした。受け持った一年生マキのお父さんだったのです。

マキの家は地区のない小学校区にありました。ですが、地区のある隣の小学校区から、小学三年生の時に家を建てて引っ越してきたというのです。そんな話は本当は必要ない話です。でも家庭訪問でお母さんはその話をされました。なぜか。お母さん自身が引っ越す前の校区にあった地区出身で、三年生までは地区の子が通う学習会にマキを参加させていた。けど、校区が変わって通わせられなくなっていた。中学生になりあらためて地区学習会に参加させたい。部落のことについて学ばせたいし、差別に負けない、差別を跳ね返すことのできる子になってほしい、という願いがあったからでした。

お母さん自身が受けてきた差別についても話されました。四月であるにもかかわらず、本当に中身の濃い家庭訪問でした。

そんな話を聞いている最中に、お父さんであるHさんが仕事から帰ってきたのです。仕事着のまま、お母さんの横に座り、腕組みをしてじっと聞いていました。ただじっと聞いていました。何もしゃべらなかったように記憶しています。

あのとき何を思っていたのか。訊きたくて、後日話題に出したことがありました。そのときにいろんな話を聞くことになりました。

Hさん自身は地区外の出身だということ。中卒で「金の卵」として東京に出、定時制高校に通いながら働いていたということ。ちょうどそのころ「吉展ちゃん事件」が起き、その直後に「狭山事件」が起き、「これはおかしい」と直感し、部落解放運動に取り組み始めたということ。それがあるから、今の自分があるということ。その話を聞かせてもらって私が感じたこと。

「すごい！　素敵！　格好いい！」

この思いは、今も変わりません。できることなら自分もそんな生き方をしてみたい。ちょっとでも近づきたい、そう思っています。

ちなみに余談ですが、Hさんは私の知る人の中で唯一、ビートルズの日本公演を観に行った人でもありました。ビックリでした。（笑）

イラスト　中島　亜唯